

## — 岩泉町八重樫家に伝わる糸染の技法 —

眞立盛岡短大 平山 貞

目的 むらさき染の歴史は古く、その染め出す紫の色は、古来から人々のあこがれの色であった。また江戸時代には、庶民の色として親しまれていた。その昔、日本全土に分布を見たといわれる紫草も、現在では殆んどその自生を見ることがなく、幻の花となりそうである。南部の紫根は、すでに鎌倉時代から染めや薬用として用いられていたとの記録があり、藩政時代には領内産物として、計画栽培がなされていた。岩手県、下閉伊郡岩泉町の八重樫家には、南部むらさき染の技法が代々伝えられている。古来そのままの染色技法を今日伝承しているのは、おそらく八重樫家だけであろうといわれている。本研究はこの貴重な技法を、記録にとどめておくことを目的として行なったものである。

方法 南部むらさき染技術保持者八重樫フジ氏は、老令のため後継者に技法を伝授することになり、フジ氏の手による最後の染めが行なわれた。これはその時の観察と記録である。期間は昭和52年11月、同53年7月、同54年6月で、それそれぞれ予備調査、本調査、補充調査を行なった。その間、自生する紫草の観察、および紫草の栽培をも試みた。また古書により南部紫草の由来を調べ、秋田県花輪町に伝承されている紫染とも比較した。

結果 紫根染は糟の灰を用いて染めるとされているが、南部には糟の生育が乏しいので、にしこり（さめふたぎ）の灰が用いられた。またゴシの処理も行なった。花輪では布染を行なうが、岩泉では糸染を行ない、他の植物染の糸を用いて縮柄を織っている。染めの回数が割合少ない。昭和初期八重樫家を訪れた柳 泉悦氏は、その紫の色の美しさを激賞され、糸染技法が絶えないようにと願われたという。